



SUCRA さくら
学術情報発信システム / 埼玉県地域共同リポジトリ

Institution	文教大学
Title	家庭と産業社会
Author	福田, はぎの
Citation	家政学事典（日本家政学会編, 朝倉書店, 1990. 11）p.65
URL	http://sucra.saitama-u.ac.jp/modules/phoonips/detail.php?id=BKK0000984

- SUCRA に登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- SUCRA に登録されているコンテンツの利用は、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- 著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合は、著作権者の許諾を得てください。ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、出版者著作権管理機構など)に権利委託されているコンテンツの利用手続きについては、各著作権等管理事業者に確認してください。

4.10 家庭と産業社会

資本主義生産は機械制大工業に立脚し、科学技術を武器に資本（企業）間の営利追求を動機とする市場競争を通じて、社会の物質的富を著しく増大させてきた。人々の意識も競争関係の中で淘汰され個人主義的特徴を強め、また信仰心に裏打ちされた伝統的な禁欲主義から消費を美德とする物質主義への価値観の転換も進展した。これらは人間関係や人間性の深部にまで及ぶ変化だったのであり、したがって生産の発展は資本関係内部だけにとどまらずに人間そして家庭をも含めた社会全体の変容すなわち産業社会の成立という歴史的な事態へと結びつくものであった。中でも先進的な大量生産と大量流通網（鉄道や広告）そして大量消費の組合せを実現したアメリカ合衆国では、19世紀半ばにはすでに産業社会のこうした傾向が顕著になっている。ところでこのアメリカにおいて世界的に先駆的な近代家政学としての home economics が、20世紀初頭にかけて結実していったことは、家政思想史のうえでも注目し値する事実である。そこにどのような「家庭と産業社会」についての思想が含まれていたのか、この点をここでは home economics 成立の中心人物リチャーズ (Richards, E. H.) に焦点をあててみていくことにしよう。

リチャーズは実態としての家庭を産業化に比べて遅れた停滞的な女性の活動領域ととらえていた。産業化自体については否定的ではない。むしろ彼女はアメリカの工業経営の進歩性を「男性の忍耐と活力と工夫」がもたらした成功と評価している。これは翻って「家事担当者はなぜ機械工場と歩調をそろえないのでしょうか」という家庭経営停滞論になる。女性は家庭経営の面で成功していないというわけである。しかし産業化の個別具体的な実態については、リチャーズは商品の粗製濫造や環境汚染を明確に批判する立場にあった。そしてこの面でも、製品の消費者であり、また汚染された環境に直接に影響を受ける家庭が、いまだ無自覚なことが問題とされた。「何をどういう組合せで生産すべきか」について発言する特権をもっているのは消費者かつ家庭経営者としての女性であるにもかかわらず、この特権を発揮しないために、家庭は産業化のはるか後方にあり、生産のたてる「ほこり」を窒息せんばかりにこうむっている、とリチャーズは事態をみてとったのである。

この家庭停滞論はしたがって実態認識の域にとどまっていたのではなく、眼前の産業界と家庭生活の双方の実態を批判し、ともによりよい方向にかえるという実践的目的をもっていた。このうち産業界の実態に変更を加えるということは、むしろ家庭のためにである。それは産業社会を家庭という価値観から批判的にとらえかえすことに他ならなかった。同時に産業がすでにそうしていたように家庭にもいわば対等に科学とそれに基づく技術を導引してくることであった。そしてそのためには「男性の科学を家庭環境の中で役立たせるのに変革する」必要が考えられた。

この必要に応えるためには一つに、家事担当者の女

性がいかに思い込みで惑わされたりすることなく科学の正しい知識を身につけなければならない。もう一つはそのための科学教育の指導者も単に知識をもっているだけではなくそれを実際問題に適用できる応用力を備えなければならない。家庭と科学の結合のためにこの双方の課題に応えようとしたリチャーズがはじめ自宅を「正しい生活 (right living) のためのセンター」にして様々に行った実験はホームケミストリーと呼ばれた。食生活は栄養素の分析やカロリー計算と、住生活は熱効率や酸素消費、空気循環の理論と、また衣服の汚れやしみはその化学的組成と、というように、ここでは家庭が次々に科学と協力し始めた。消費者問題が一般に認識されていない当時において、産業界や政府向けの製品テストや商品加工行程検査のデータもここから提供された。

後にリチャーズは多くの協力者を得ながら学校給食や地域の食事サービスあるいは情報不足のアメリカ中西部農村地域向けの通信教育など精力的な社会活動局面を切り開いていくが、その思想を支えたのは一貫してこの「正しい生活」という価値観と同時に応用力を備えた科学教育を実践するという姿勢であった。「家庭科学とはすべての近代的な科学知識の応用である」という新しい応用科学分野開拓の展望も芽生えふくらんでいったのである。やがて結実する家政学の枠組みはしかしケミストリーというより、むしろその範囲を超えたというべき独自のエコノミックスである。

「エコノミックスとは、金銭はもちろん、時間とエネルギーに関して、経済の方針にかなった家庭の経営を意味している」とリチャーズは述べる。しかもそれは「子どもたちの保護・養育のための、あるいは自己犠牲の特性と外界に対する強さを発達させる場所」としての家庭の経営なのであり、したがって単に経済合理主義的経営なのではない。「最も重要なことは、人間の心と力の経済であり、その全きことが家庭という場で最善に行われる」ことなのである。この「家庭の経営」が、生活の個々の具体的問題に関して化学を取り入れた科学的分析的要素をもちうることは繰り返すまでもない。一方モノとヒトを一つの空間・関係として包括する家庭の経営であるかぎり、そこには総合的要素が不可欠である。このエコノミックスが含意する「経済の方針にかなう」とは分析的科学を適宜に発揮しうる家庭の経営＝総合力とみることができる。これは自覚的に身につけられなければならない。家庭は産業の発展から取り残されてはいるが、元来ヒトは消費をつうじて「富の使用に関連した大きな責任」をもっているはずだからである。

産業社会の発展の中で家庭の発言力を発揮する必要性は成熟していったといえよう。しかしもとよりこの必要性は、家庭を一つの普遍的価値とする理念をもち、そこから家庭の実態を冷静にとらえる中で初めて具体的に認識の出発点に位置づけることができる。そして発揮される発言力とは、この停滞の実態を産業(外的)と家庭(内的)双方の修正を通じて克服していく力、しかもあくまで家庭という価値に根ざした科学的批判的な理性の力であった。

(福田はぎの)